

---

## 発展学習05-1 「好子出現」と「嫌子消失」の区別

---

第5章までのところで4通りの基本随伴性について説明してきました。ここで応用問題として、「ストーブに火をつける」という行動はそのうちのどの随伴性によって強化されているのか考えてみることにしましょう。これには2つの考え方があります\*1。

- (1)好子出現説：【           】→【ストーブに火をつける】→【暖気という好子出現】  
(2)嫌子消失説：【低温という嫌子あり】→【ストーブに火をつける】→【           】

まず、環境の変化を純粹に物理的な操作として考えてみましょう。この場合、ストーブに火をつけるということは熱エネルギーを出現させることになるので、(1)の「好子出現の随伴性説」が正しいということになります。しかしこの考えでいくと、暑い時にクーラーをつけるのは熱エネルギーを減らすことになるので「嫌子消失の随伴性」になってしまいます。素朴に考えると、ストーブに火をつけるのもクーラーで涼しくするのも同じ随伴性で維持されているように思えるますが、統一的には説明できません。

次の考えは、物理的な操作とは切り離して、その人にとって具体的にどういう問題が存在し、どう解決したのかという視点からとらえるものです。寒さも暑さも人にとっては具体性のある不快な現象です。いっぽう快適な温度というのは具体性が無く、いわば平穏な何もない状況である。こう考えるならば、ストーブに火をつけるのもクーラーで涼しくするのも、不快な刺激(=嫌子)を消失させる結果をもたらす随伴性によって維持されると考えることができます。これは(2)の嫌子消失説です。

この議論は、行動分析学者の間でも決着していないように思われますが、私自身は、(2)の考えを支持しています。理由は、

●好子や嫌子は、行為者にとって具体的な事象であり、かつ、出現や消失のコントロールが可能であること。

を望ましいと考えるからです。物理的にはエネルギーが出現したとしても、行為者にとっては「低温」という不快で具体的な事象が消失したわけですから「嫌子消失」。暑いときにエアコンのスイッチを入れるのも「高温」という不快で具体的な事象が消失したわけで

---

\*1【   】の中は、「直前条件、行動、結果」を表すものとします。【   】がブランクの時は何も無い平穏な状態を意味します。

すから同様に「嫌子消失」です。

---

ところで、(2)の嫌子消失説の考えに基づくと、空腹の時にリンゴを食べるのは、空腹という不快な現象を消失させる随伴性によって維持されているのでしょうか。いや、リンゴはあくまで好子です。リンゴのまわりに具体性のある不快な刺激状況は存在しません。これは、食物への接触が長時間絶たれたために、食物の好子としての機能が高められたと考えます。このことは確立操作とあって、随伴性の質とは厳密に区別されています。

もっとも、空腹を余儀なくされる環境に具体性があれば、それ自体が嫌子として機能することもあります。例えば、人道的には許されないことであるけれど、捕虜収容所で「丸一日メシ抜き」という罰があったとします。捕虜たちは、その罰を避けるために重労働に従事するでしょうから、この場合の「空腹をもたらす環境」は明確な嫌子となります。

---

『行動分析学入門』（杉山ほか、産業図書、ISBN4-7828-9030-3）の原書版の執筆者であるマロットは、この問題について次のような見分け方を提唱しています。

それによれば、好子出現による強化の場合には、その好子の効果を高めるような状況自体も好子になります。専門用語を使えば「当該の行動随伴性の確立操作自体が好子になる」（日本語版、143頁）ということです。具体的に言えば、食物の強化効果が高まるような変化をもたらす行動、たとえばお腹を減らすために運動するような行動が起こるかかどうかということです。

おぼれかけている人が岸にたどりつく時の「岸」は決して好子ではありません。もし好子であるならば、その人は何度も水に飛び込むはずですが。

で、もとに戻って、もしストーブに火をつける場合に「暖かさ」が好子であるとする、  
「暖かさ」という好子の効果を高めるために、わざわざ外に出て寒さに身を晒す行動が起こるはずですが。それが起きないのは、火をつける行動が、あくまで「寒さ」という嫌子が消失する随伴性によって強化されているためということの証拠となります。

---

ところで、このマロットのアイデアを適用すると、お金が好子であるならば、お金が好子となって働いている人は好子の効果を高めるためにわざとお金を捨てたり、盗ませたりすることになるのでしょうか？ そうでないとするとその理由は？\*2

これは、お金が習得性の好子であることと関係していると思われます。習得性好子というのは、必ずその基に別の好子とのリンクがあります。お金が好子になるのは、それが日常社会の中で、さまざまな別の好子、たとえば食料品とか衣料品、娯楽品、旅行などに交換できるからです。もし無人島に漂着して自力で生活しなければなくなったとしたら、お

---

\*2 別のケースとして「お金が好子」ではなく「お金を儲けること自体」が好子となっている人もいます。この場合、いくら大富豪になっても、さらに金を儲けるためにビジネスを拡張したり、ゲーム感覚で金融取引に熱中したり、ギャンブルに熱中したりするでしょう。

金には何の価値もありません。その時点でお金は習得性好子としての機能を失うことになります。

食物とか性的刺激のような生得性好子の場合には、確立操作の 1 つとして「遮断化」(deprivation)が有効となります。断食をすれば食物を求める行動がますます増加するし、しばらくセックスをしないと性的な刺激への関心が高まるという意味です。ところが、お金に対する接触をいくら断ってもそれだけでは、お金の好子としての効力は増加しません。これはいま上に述べたように、お金があくまで習得性の好子であることに起因しています。

では、お金に対する確立操作はできないのか？ 直接は無理でしょう。しかし、それとリンクしている元の好子への確立操作を行えば、間接的にその効力を高めることはできます。たとえば、生活費を得るためにアルバイトをしている人が居たとします。その人がスポーツを始めて以前より腹が減るようになると、食料をたくさん買うためにより長い時間アルバイトをするようになるかもしれません。この場合、お金の好子としての効力は、お腹を減らすことに絡む確立操作によって間接的に高められたと考えることができます（もっとも、「お金→食料」という対提示による習得性好子形成の機会も同時に増えるので、これが間接的な確立操作の事例になりうるかどうかはもう少し考察が必要）。